吉田健一著作集

XXI

書架記

ヨオロツパの人間

集英社

吉田健一著作集 第二十一巻
書架記　ヨオロッパの人間
昭和五十五年五月二十日　第一刷印刷
昭和五十五年六月四日　第一刷發行
著者＝吉田健一
發行者＝堀内末男
發行所＝株式會社集英社
東京都千代田區一ッ橋二丁目五番地一〇號
電話＝東京（二三〇）六三六一〈文藝出版部〉
東京（二三八）二七八一〈販賣部〉
整版所＝株式會社中臺整版
印刷所＝大文堂印刷株式會社
製本所＝株式會社石橋製本工場
© 1980 Nobuko Yoshida, Printed in Japan
0395-171021-3041　落丁本・乱丁本はおとりかえします

吉田健一著作集　第二十一巻　目次

書架記

ラフォルグの短篇集　七
「ヴァリエテ」　一三
プルウストの小説　一六
ドヌ詩集　一九
「悪の華」　二六
ワイルドの批評　二八
エリオット・ポオルの探偵小説　二九
マルドリュス譯の「千夜一夜」　一〇九
ホップキンス詩集　一一三
「パルマの僧院」　一一六
イエイツ詩集　一一五
「ブライヅヘッド再訪」　一一〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「テスト氏」　一八三
ディラン・トオマス詩集　一九六

ヨオロッパの人間
Ⅰ ヨオロッパの人間　二二三
Ⅱ 中世紀　二三〇
Ⅲ 英國女王エリザベス一世の宮廷　二四六
Ⅳ 十七世紀　二六二
Ⅴ ホレス・ワルポオル　二七八
Ⅵ 十八世紀の女達　二九四
Ⅶ ヴォルテエル　三一〇
Ⅷ フランス革命　三二六
Ⅸ 十九世紀 Ⅰ　三四一

X 十九世紀 II　三九九
XI ランボオ　三五五
XII ヴァレリイ　三九一
解題　四〇九

書架記

ラフォルグの短篇集

この頃餘り讀まれない作者の一人にラフォルグがゐる。それが何故なのか考へて見たこともないが兎に角その全集は戰爭で中斷したままで、その後に見ることが出來たのはパリの Pierre Belfond といふ本屋が出した詩の選集が一册と戰前にラフォルグの全集を出してゐた Mercure de France 社が同じ紙型を使つて重版したものと思はれる *Moralités légendaires* といふ短篇集一册だけである。これは確か全集の第三卷に當るものでこつちが持つてゐた全集はどうしたかと言ふとその發行を中斷させたのと同じ戰爭で燒いてしまつた。

フランスでラフォルグの名前を餘り今日聞かないこととともこの戰爭が多少は關係があるのではないかといふ氣もする。これは色々な事情からフランスの歷史に一轉機を劃した事件のやうであつて例へばヴァレリイが戰爭中に書いた手紙その他を讀んでゐるとそのことを感じないではゐられない。又この轉機はフランスの文學史の上で最も華々しい成果を收めた時代の一つの終りに來たものでもあつて、もしこれからのフランスに期待が掛けられるものならば今日のフランスで誰が讀まれてゐないかとい

ふのはどうでもいいことである筈である。考へて見るとラフォルグが一八八七年に死んでからまだ百年とたつてゐない。その間に世界大戰が二つ挾まつてフランスのやうに常にヨオロッパ文明の中心にあつた國にさういふことが起つて何かがこれからあるのでなければ可笑しい。本當は今度の戰爭で國が亡びるのではないかと思つてゐたのがそれどころではなかつた。先づ千年は續いた勘定になるフランスの歷史を振り返るのを忘れてゐたのである。

ラフォルグの本が現在は手に入れ難いといふことから話が逸れてしまつた。別に本が手に入らなくても困ることはないのでラフォルグのやうに繰り返して讀んだ人間のものになると改めて詩集を讀む機會を得てどれか一篇の一行を見るとその次の行が自然に頭に浮び、これでは詩を讀むといふことをしてゐるのかどうか解らなくなる。併しそれにも增して讀んだのが前に觸れた短篇集かも知れない。これはラフォルグにその一册しかないもので二十七歲で死んだ人間の晚年と言ふのも何か妙であるが、その極く晚年に書かれたものであることもこの短篇集をかういふものにしてゐることが考へられる。同じく詩集では死後に出た「最後の詩」といふ題のがラフォルグの詩作中の壓卷であつてそれだけにここで言つた理由によつて今讀んでも仕方がない。併しそれは從つてその詩を忘れたといふことの反對でその數行、數十行は死ぬ時まで頭の中のどこかで響いてゐるに違ひない。

題と言へばいつかその短篇集の題を譯す必要があつて困つたことがあつた。moralités といふのはヨオロッパの中世紀に何かキリスト教の教義に卽して道德上の教訓を民衆に說く爲に各種の德、惡德などの抽象的な觀念を登場人物に仕立てた芝居でその初めの目的が教訓にあつたのでもその娛樂としての性格が次第に强くなつて行つて後のヨオロッパの劇一般に發展したことは說明するまでもない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

又さういふ譯だつたから猥雜な臺詞や仕種で觀衆の笑ひを誘ふといふこともあり、要するに中世紀といふ健康な時代に適した幼稚な血の氣が多くて型破りな芝居だつたと思へば間違ひない。その型破りで闊達であることにラフォルグは目を付けたのでそれは何でも自由に、極端を恐れずに言つてのけてその上にそれを茶化して全體に圓みを與へることを許し、これだけのことが保證されてゐれば幾らでもその枠內で辛辣に、又優雅に、又素直になる餘地があつた。この芝居の一種を短篇の形式に移すことをラフォルグは考へたのである。

併しまだ légendaires といふことが殘つてゐた。この方が寧ろ簡單で moralités は字引では教訓劇と出てゐるが、その教訓劇が兎に角キリスト教の教義に基いたものだつたのに對してラフォルグはギリシヤ、ロオマに始るヨオロツパの傳說全體に材料を求め、これはヨオロツパの傳說といふのがこれもギリシヤ、ロオマ以來凡そ人間的な要素に富む性質のものであることからラフォルグはその中から氣に入つたものを選んで實は自分の時代とその時代の生活を描くのに使ふことが出來た。併しこの短篇集の題を譯すことに戻つて、それで字引に出てゐることをそのまま取れば Moralités légendaires が傳說的な教訓劇になるが、これでは何のことか解らない。それでもその時はどうしてもこの題を譯す必要があつたのでさういふ日本語にする他なかつた。その途端にラフォルグの實際の短篇集はどこかへ行つてしまつた感じがしたが、どういふことでも先づ日本語に直した上でなければ日本では通用しないといふのも厄介なもので我々日本人に日本語しか解らないといふのが既に一つの傳說である。

尤もそのことで別にラフォルグの短篇自體が傷くといふこともない。これを最初に讀んだ時に經驗したことはその後にも先にもないもので、こんなことを書いた人間もゐたのかと思ふよりも前世か何

かで自分が書いたことをそれまで忘れてゐた感じだつた。ラフォルグがその生前に散文の形で發表したのは纏つたものではこの幾つかの短篇だけでシモンズはその散文をランボオのよりも數學の性質を帶びて自由闊達と評してゐるが確かにランボオ、ラフォルグ、ヴァレリイとこの三人の散文を竝べて見るならばフランスの文學が十九世紀後半から二十世紀前半に掛けての約百年間にその最も實り多い時期の一つを迎へた事情も解る氣がする。フランスの散文は十八世紀に一應の完成に達したことになつてゐる。併し言葉の使ひ方の完成といふのは言葉を使ふ精神が活動する範圍に應じたもので十八世紀のフランスでは後に精神が負擔することになつたことをまだ多分に外部の秩序が肩代りしてゐてくれた。その秩序が十九世紀になつて失はれたことは言葉が精神のどのやうな狀態にも應じてこれを表すだけの働きをしなければならなくなつたことに他ならない。

ランボオの散文詩には言葉で表せないものがあることを恐れなくなつた人間の境地が窺へる。その自由をラフォルグは實地に、そしてそれが出來る所から樂しげに行使して見せてゐてこの後を受けてヴァレリイは言葉がどういふことでも表せることに卽して逆に精神にどこまでその活動が推し進められるものか驗してゐる。併しラフォルグの散文のやうに言葉が自在に使はれてそれが我々の精神の活動も含めて我々の生活を普通にそれを我々が意識する以上に明確に表すものであるのはそれを讀むものが殆ど啓示に近いものを經驗することであり、それは我々自身の精神の解放であつて全くそこに自分があると感じることがその言葉を前に自分が書いたのだといふ錯覺に陷ることにもなる。ヴァレリイが言つてゐることはそれが指すことに目を瞠る思ひでその爲にどれ程の言葉の妙技が演じられてゐるか我々が必ずしも氣付かないことがある。併しラフォルグは我々人間の通常の世界にゐてそれが恍

惚の狀況から識閾下のことに至るまでのものであるから完全に人間の世界なのである。

それで短篇の順では先づハムレットが登場する。別にメエテルリンクがシェイクスピアのハムレットに文學に現れた最初のものを考へる人間を見たりした爲ではなくてそのことはこの短篇を讀めば解る。これはその他に一般にこのハムレットといふ人物に就て言はれてゐることの凡てがラフォルグの短篇を讀むのに少しも必要でないといふことなのであるが、このハムレットの傳說はシェイクスピアが作つたものなのでラフォルグはそれを使つて自分のハムレットを書いてゐる。ハムレットはもともとデンマアクの歷史に出て來る大してどうといふことはない人物だつたのをシェイクスピアが取り上げてその普通とはかなり違つた境遇に處して普通であることを失はないでゐるだけの人間に仕立てた。ハムレットの父親をその弟が殺してハムレットの母親を娶り、それがハムレットに解るといふのが先づ史實と思はれるシェイクスピアの材料でさういふ仕儀になればハムレットでなくてもものを考へる位のことはする。

併しそれを悲劇の約束に託して略す代りに普通の人間がさうした場合にするやうに考へもすれば迷ひもして、そして決心したことを行動に移すこともする一箇の人物を作る道をシェイクスピアは選んだ。確かに所謂、英雄であるべき物語、或は悲劇の主人公が英雄でないこれはヨオロッパの最初の例かも知れなくてこれが併し明治以後の日本で暫くは持て囃された、それでも人間かと思ふやうな代物がシェイクスピアの悲劇の主人公になつたことでないのは言ふまでもない。シェイクスピアのハムレットも獨白といふことをするが、これは一人の人間がものを考へてゐるのが舞臺で一つの現實になつてゐるのでそれが現實であるからハムレットは策動もし、笑ひもし、人を殺すこともして本當にもの

を考へるといふことをした人間が凡てさうである通りハムレットにとつてもものを考へるといふことを他の行動から區別する必要がない。ここに一人の血肉を備へて又それ故に精神の持主でもある人間がゐてその人間が何かと面倒なことを片付けなければならないのがラフォルグの材料になつた。

それは十八世紀のヨオロッパにあつたやうな秩序が失はれた後はただ生れて育つて年取つて行くだけでも人間は何かと面倒なことに出會ふからで、これはその人間が人間らしい精神の持主であればある程さうであり、その一人であることを免れなかつたラフォルグはハムレットの傳說を燒き直して別なハムレット、又見方によつてはシェイクスピアのハムレット以上にハムレットであるものを書くのに必要な着想にも經驗にもこと缺かなかつた。そしてそれを讀んで打たれるのはこのハムレットがルネッサンスの亂世に狀況を假託して生きる今日の、でないまでも少くとも近代の人間でありながらその亂世がその通りに人間の常態でないことを一刻も忘れてゐないことでこれはシェイクスピアのハムレットがその時代を關節が外れたものと見てゐることに繫り、その點でもラフォルグがこの人物を選んだことが領ける。一口に言へばそこに浪曼主義と正反對のものがある。

それはここではどうだらうと構はないことであるがこの人間の常態、平和、平凡、退屈を理想的にでなくて必然的に人間のさうあるべき姿と考へてゐることがラフォルグの皮肉にも、時には詠嘆にもその價値を與へてゐる。例へばラフォルグはシェイクスピアの悲劇の筋を自由に變へてゐてそのハムレットは墓場で墓掘りの一人に宮廷の道化役だつたヨリックが自分の異父系の兄で自分自身は帝王切開で生れて母親が死んだと聞かされてその邊にヨリックの頭蓋骨が掘り出されて轉がつてゐるのを拾ひ上げてかういふ一節になる。

……可哀さうなヨリツク。ヨリツクの知性を小さな蛆どもが食べてしまつた。……あれは先づ盡きない頓智に惠まれてゐる私の兄だつた（九ヶ月間は同じ母親だつた譯だ）、尤もそんなことに何かの意味がもしあればだが。あれは人物だつた。それもなかなかひねくれた性格の持主で、そして自信があつた。あれはどこに行つたのか。それを見たものも知つてゐるものもなくて夢遊病者だつたことさへも跡形もない。その點ぢや常識といふものさへも消えてなくなるのださうだ。この中に前は舌があつてそれが Good night, ladies, good night sweet ladies! good night, good night! などと喉の奥から聲を出して言つてゐたのだ。又歌ひもして、それが餘り品がよくない歌のこともあつた。——これは豫見した（ハムレットは頭蓋骨を前の方にはふり投げる仕種をする）。又思ひ出しもした（今度は後の方へ同じ仕種）。これは話をし、笑ひ、欠伸もした。——何といふ悲しいことだ。〔……〕私は明日にも出發して死骸を保存する一番間違ひがない方法を調べて來たい。……歴史上は群衆である人達もやはり曾てはゐて讀み書きを覺えたり、爪を切つたり、毎晩煤けたランプに火を入れたりして愛し合つて食ひしんばうで見榮を張つてお世辭や握手や接吻が大好きで噂話をして暮しながら例へば明日のお天氣はどうでせう。もう直ぐ冬が來る。……今年は乾し李が食べられなかつたなどと言つてゐたのだ。……

これと次の終りに近い一節を同じ散文で讀める幸福といふのは言ひ方が少し變だらうか。その場面はやはりその墓地でそこで夜ハムレットがオフェリアの兄のラエルテスに出會ふ。

――これは、ラエルテス君、貴方でしたか。
――さうだ、私だ。そしてお前が哀れな氣違ひで科學の最近の進歩によつて法律上の責任がないものであることになつてゐなければ私が尊敬する私の父とよく出來た娘だつた私の妹の死を今この瞬間にその墓の前で償はせてやる所なのだ。
――ラエルテス君、それは私にとつてどうでもいいことなのだ。併し貴方の御意見は充分に尊重する積りでゐる。
――天よ、何といふ道義心の缺如。
――さうお思ひになるのか。
――あつちへ行け、氣違ひ奴。でないと私が何をするか解らない。そんな風に氣違ひで終るものは芝居をすることから始めるのだ。
――それで貴方の妹さんは。
――おお。
その時この幻影のやうに明るい月夜に百姓家の犬のどうにも類を絶して孤獨な遠吠えが聞えて來てこの立派な人間であるラエルテスの心が（ラエルテスこそこの話の主人公であるべきだつたことに今になつて氣が付いたが、もう遲い）それまでの三十年の生涯が全く説明が付かない無名のうちに過されたことで溢れ、又溢れる。これは餘りだ。そしてラエルテスは片手でハムレットの襟を掴み、片手で本ものの短劍をその胸に突き刺す。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com